

19

安城

志貴小学校

サトウ	マユミ
名前	佐藤 真弓

分科会番号	14
-------	----

分科会名	特別支援教育
------	--------

研究主題

聞くことを楽しむ子の育成を目指して

～特別支援級自立活動 「ソーシャルスキルトレーニング」の実践を通して～

1 主題設定の理由

本校の特別支援学級には、情緒障害をもつ3年生の男子児童3名が所属している。3名とも学習意欲が高く、4月から始まった理科と社会科の授業を楽しみにしており、放課に教科書を自主的に読んだり、分からない言葉を調べたりしている。社会科の地図記号に興味があり、学習用タブレットを活用して記号を勉強すると、すぐに暗記し、プリントやテストでは間違えることなく回答できていた。特別支援学級に所属しているが、学習の面において遅れがあるとは感じなかった。しかし通常学級で学習できるかということそれは難しい。社会科の交流でスクールアシスタントの教師が付き添っているときに、授業進行の教師から地図に色を塗るように指示が出たが、話を聞いていなかったために「何をやるの?」とスクールアシスタントに質問をしていた。また、音楽の交流授業では、ピアノを片付けるよう指示が出ていたが、指示どおり動けず、それを見たスクールアシスタントが指示を繰り返し伝えると片付け始めた。このように、注意深く聞くことができないため、通常学級で学習することは困難なのである。個別に指示を出せばできることでも、集団活動においての指示ではできないことがこの3名の共通の課題であると感じた。自分のやりたいことや話したいことに夢中で、興味のない話を聞くことができず、指示通りに動けないために、通常学級で学習することが困難だと感じたので、自立活動において、聞く力をつけたいという願いを込めて本単元を設定した。

2 研究の構想

(1) 研究の目標

自立活動において、「聞く」の基礎的なスキルを身につけ、言葉を使ったコミュニケーションを楽しむことができる子の育成

(2) 研究の仮説と手立て

仮説1

個々の実態を的確に把握し、自立活動の時間に個々の実態に応じた的確な指導内容と指導目標を設定すれば、児童は基礎的なスキルを身につけることができるだろう。

手立て1 自立活動内容6区分27項目のチェックシートを使い、個々の実態を把握する。

手立て2 実態を踏まえた上で、個々に必要な支援を見出し、指導方法と指導内容を設定する。

(2) 指導目標と内容の設定 (手立て2)

「自立活動指導目標・指導内容設定シート」を使い、指導目標と指導内容を作成した。(資料2)

児童 A の困っていることは、嫌なことをされても「やめて。」と言うことができず、我慢してしまい、それがストレスとなって情緒不安定な状態を招くことである。また、授業内容や活動に対しての興味に隔たりがあり、興味がないことは行わないため、交流学級でグループ活動を行うことは難しい。そして、興味があっても集中力が続かないという困難も抱えている。

このシートの結果から、他者に伝える能力を身につけられるような自立活動が必要と感じた。また、児童 A の集中力の短さを考慮し、興味をもって少しでも長く集中して活動できる自立活動を設定する必要があるとも感じた。そこで、1時間の授業で2つの活動を行い、コミュニケーション能力を構成する聞く力の発達を重点的に指導するように計画を立て、目標を「聞くことの楽しさや必要性を理解し、聞く力をつける。」に設定した。

(3) SST の実践 (手立て3)

自立活動の時間に、SST の『聞く聴くドリル (文英堂)』を行った。予定の変更や状況の変化で不安な気持ちになる児童たちの実態から、授業開始の最初に必ずトレーニングを行うように習慣化した。文章を聞き、つじつまが合わない言葉を探す問題は、3人の児童にとって興味を引く内容であり、意欲的に取り組む姿が見られた。集中力が長く続かない児童の実態から、問題は一日に3問と決め、児童がもっとやりたいと言っても3問で終わるようにした。また、児童 A が苦手とする状況の変化をできるだけ減らすために、3問目の問題を行う前に「これが最後だよ。」と授業の見通しがつくように声をかけた。何度かトレーニングを繰り返すうちに、文章を聞きとれるが、つじつまが合わない言葉を見できないという問題が出てくるようになった。『エスカレーターや電車に乗る時は、降りる人がみんな降りてから、待っていた人が乗ります。』という問題で、児童たちは、エスカレーターの言葉と実物が一致せず、つじつまが合わない言葉が分からなかった。さらに、エスカレーターとエレベーターの区別も理解していなかった。そこで、答えを問いかける手順を変えてみることにした。

自立活動 指導目標・指導内容設定シート

学級・学年	小学校 第3学年				
障害の種類・程度や状態等	自閉症スペクトラム・ADHD				

① 障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよみ、課題等について情報収集

授業からの情報を活用することは苦手だが、授業から入った情報は理解しやすい。授業の最初に、流れや課題を話すことで落ち着いて活動に取り組むことができる。授業が少ないため、話が伝わっていない。相手の話を聞いて話すことが苦手。物になるものがあると、衝動的に動いてしまう。友達と簡単な会話を通して、手遊びや課題遊びができる。集中力が足りない。

↓

②-1 収集した情報(①)を自立活動の区分に即して整理する

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	・状況の変化が苦手	・衝動的に動いてしまう。 ・他人への関心が少ない。	・授業から情報を得ることが苦手。口頭による指示は伝わりにくい。	・すぐに動きます。	・相手に自分の思いを伝えることが苦手。 ・会話が一方向で話を合わせずに話をする。

②-2 収集した情報(①)を学習又は生活上の困難や、これまでの学習状況の観点から整理する

読みことと書いたり、はっきりやめてほしいことができず、我慢してしまふ。また、授業方が定いたの自分の思いを相手に伝えることができます。自分の中でため込んでしまふ。こうしたことが嫌いと本人のストレスがたまり、情緒不安定な状態になる。
・興味のあることは意欲的に取り組めるが、興味がないと聞いたり、活動に参加したりすることができず、単に活動が難しい。また、興味があっても集中力が続かない。

②-3 収集した情報(①)を〇〇年後の姿の観点から整理する

・中学校在習児童や、高等学校卒業後、社会に出て就労することを意識し、伝えたいことを整理して、必要な道具・材料をそろえ、準備の中で課題に取り組む力を段階的に身に付ける必要がある。

↓

③ ①をもとに②-1、②-2、②-3で整理した情報から課題を抽出する

・落ち着きがない(心)
・予定の変更や状況が変化すると不安になる(心)
・会話のキャッチボール、礼儀やTPDの理解が難しい(人)
・読みやサイン、文書やことわざの理解が難しい(人)
・聞くことが難しい(度)
・口頭指示が通りにくく、興味がないと理解が難しい(度)
・会話の中で使われる語彙が少ない(コ)
・生活上使う言葉や言葉の理解が不足している(コ)

↓

④ ③で抽出した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す

・予定の変更や状況が変化すると不安になり、落ち着きなくなってしまう。そして、落ち着きなくなると、聞くことができず、口頭指示を理解できないので、活動においては、落ち着ける環境づくりに配慮することが必要。
また、語彙が不足しているために話を聞いても理解できず、会話を長く続けることができなかったり、会話を興味がないようにしている。語彙の習得をする活動が必要である。
・聞くことに興味がないため、聞くことの楽しさや、必要性を伝える必要がある。

↓

⑤ ④に基づき設定した指導目標

課題解決の達成を整理する中で今後すべき目標として	聞くことの楽しさや必要性を理解し、聞く力をつける。
--------------------------	---------------------------

↓

⑥ ⑤を達成するために必要な項目を選定する(選定した項目のセルを塗りつぶす)

指導目標を達成するために必要な項目の選定	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
日常生活のしくみや生活習慣の形成	・理解の安定	・気持ちを上手に伝える	・伝達する言葉の活用	・姿勢と運動・物の基本動作	・コミュニケーションの基礎的スキル	・コミュニケーションの基礎的スキル
学習状況の把握と学習意欲の向上	・状況の理解と変化への対応	・他者の言葉や表情の理解	・授業や教材の特性についての理解と活用	・姿勢保持と運動・動作の機能的な活用	・言葉の理解と活用	・言葉の理解と活用
学習活動の状況の把握と意欲の向上	・学習意欲の向上	・自分の理解と行動の調整	・授業や教材の特性についての理解と活用	・日常生活に必要となる基本動作	・言葉の理解と活用	・言葉の理解と活用
学習活動の特性の把握と生活習慣の形成	・学習意欲の向上	・他者の言葉や表情の理解	・授業や教材の特性についての理解と活用	・姿勢保持と運動・動作の機能的な活用	・言葉の理解と活用	・言葉の理解と活用
学習活動の特性の把握と生活習慣の形成	・学習意欲の向上	・他者の言葉や表情の理解	・授業や教材の特性についての理解と活用	・姿勢保持と運動・動作の機能的な活用	・言葉の理解と活用	・言葉の理解と活用

↓

⑦ 最終的な指導内容

選定した項目を整理して、最終的な指導内容を設定	ア 事前学習	イ 授業中	ウ	エ	オ
	ア 事前学習として、聞く力をつけるために、短時間で行うトレーニングを行う。	イ 授業中グループを通して、会話の必要性や楽しさを伝えるようにする。			

資料2

最初は CD から聞き取った全文を言うように指示を出し、次に、つじつまの合わない言葉が何であったかを問いかけることで、文章が読み取れているのか、単語が理解できていないのか判断するようにした。そして、単語が理解できていないと確認できたときは、実物を見せたり、タブレットを使い写真を見せたりし、言葉の意味を説明したりすることで、語彙力も補うようにした。

(4) ゲーム活動の実践（手立て4）

自立活動の時間に『かくしてるものなあ〜んだ?』の活動を行った。(写真1) ゲームは、児童1名が教師と一緒に選んだ物を箱に隠し、2名の児童が隠した児童に質問をしてヒントをもらい、箱の中身を当てるという簡単なゲームである。ゲームとして楽しみながら取り組めるので、児童Aは積極的に参加しようとした。しかし、やってみると簡単に答えを当てることができなかった。当てられない理由の一つは、質問の仕方が分からないため、「何色ですか?」と質問せず、「赤ですか?」など答えを聞いていた。



写真1 ゲームでヒントを出す児童Aの様子

この聞き方では答えが出るまでに時間がかかってしまうことを話し、話型を使って質問の仕方を指導し、ゲーム中に話型を見ながら質問ができるように掲示をした。すると、児童たちの質問の仕方が変わり、答えを聞くことから、質問をするようになった。

また、当てられない理由の二つ目には質問に対してのヒントの出し方が分からないことにもあった。パックに入った卵を箱に入れたとき、「何色ですか?」という質問に、パックの色を答えるのか、パックの中の卵の色を答えるのか迷っていた。「どんな形ですか?」という質問には、パックの形を答えれば良いのか、それとも中に入っている卵の形を答えれば良いのか迷い、ヒントを言う児童の言葉が止まってしまった。そこで、こういう場合のヒントはどのように伝えれば良いのか話し合い、話型を掲示した。この話型を見た児童Aは「何色ですか?」という質問に「透明の中に白があります。」というヒントを出すことができると気づき、「どんな形ですか?」という質問には、「四角の中に丸い形があります。」と言えるようになった。さらに、毎回行う授業の振り返りでは、「箱の中身をヒントが言いやすいものにするようにする。」と主体的な発言があり、次回の自立活動のめあてにつながった。

そして、当てられない理由の三つ目には他の児童のやり取りを聞くことができないから、答えが当てられないというところがあった。ゲーム中、自分がヒントを与える側だったり、質問する番だったりするときは良いのだが、他の二人がやり取りしているときなどは興味がないため聞いておらず、答えに迫るヒントが出ても答えられなかった。(写真2) そこで、聞くことに集中できるように環境の見直しをした。授業中は机の上に物を置かないようにし、無意識に手が動いてしまうことを防いだ。また、発言は一人ずつ挙手してからと決め、言葉が聞きとりやすいようにした。そして、聞くことができれば、答えを当てることができてより楽しい気持ちになると感じられるように、答えを当てた人と答えを当ててもらえるようにヒントを出せた人はシールを貼ることができるというルールを追加した。その結果、集中して聞こうという意識が高まり、ヒントを聞いて答えを考える時間が短くなった。



写真2 他の児童が話しているときの児童Aの様子

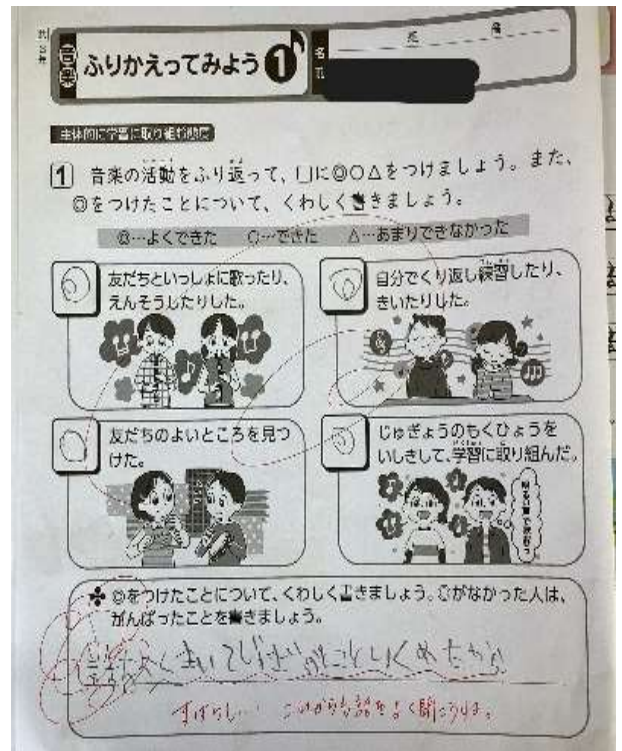
5 研究の成果

(1) 仮説1に対する手立ての検証

手立て1のチェックシートを使い、個々の実態を確認したことで、児童Aが抱えている困難さを把握することができた。そして、手立て2の自立活動指導目標・指導内容設定シートを活用することで、児童Aの様々な困難の関係性が分かり、それに対して行う自立活動の目的や活動を具体的に設定することができた。また、仮説1から仮説2に繋がっていくことができたので、手立て1及び手立て2は有効であると考えられる。

(2) 仮説2に対する手立ての検証

手立て3のトレーニングでは、間違いを探すことに楽しさを感じた様子が見られた。間違いが分かったかと問いただすと、一斉に挙手をし、答えることができた。また、CDのスタートボタンを押すときに、「押すよ。」と伝えると、話をやめ、静かな環境を作ろうとする主体的な行動が見られた。さらに、手立て4の実践に書き記したように、授業の振り返りで今日の活動内容を踏まえて、改善策を考えるような主体的な動きもあった。手立て3及び4を繰り返すうちに、毎朝行っているスピーチで、友達のスピーチを聞くと、質問ができることに気付き始めた。その結果、スピーチで、話を聞いてから質問する活動が活発になり、質問する回数が増えてきた。また、音楽の授業の振り返りに「話をよく聞いてとりくめたから。」と書いていた。このことから、聞くことの大切さが理解できたと分かる。



資料2

6 今後の課題

児童Aが自分の気持ちを伝えられない理由は、語彙が不足していることや、話型を理解していないことからだと研究から分かった。また、環境の影響で聞く力が変化することも分かり、他者の話を聞いていないことが語彙の少なさに繋がっていると分かった。聞く力は、漢字や計算の練習のように練習すれば身につくのではないかと考え、聞くトレーニングを設定した。しかし、語彙が乏しいため、文章を聞いても意味が理解できず、聞くトレーニングだけで聞く力をつけることはできないということが研究結果である。今回の研究を通して、児童Aのように会話を使ったコミュニケーションを苦手とする理由には、たくさんの要因が関わっているため、その要因を全て把握することが大切だと考えられる。その要因を把握するためには、自立活動内容6区分27項目のチェックシートや自立活動指導目標・指導内容設定シートの活用が効果的であった。児童Aには、聞くトレーニングに並行して、語彙を増やすトレーニングも必要である。また、文法の基礎が身につけていないため、話型通りに話すことはできたが、接続詞を用いて長い文章で話すことは難しく、一問一答の会話の流れが多く見られた。今後は、国語の教科で語彙を増やす学習や文法を教えていきながら、自立活動で会話を通したコミュニケーション能力の育成を行うなど、教科の相互性も考えながら自立活動を行いたいと思った。